

国際啄木学会編 『石川啄木事典』

第一部の「作品篇」は各作品ジャンルについて現在の問題意識の先端部分を示しつつ概説を試み、石川啄木の「人と作品」の入門的、専門的内容を提示することを主眼とした。第二部の総数五三六にのぼる項目は、①イメージ項目を中心にして石川啄木の感情内風景を描くことを主眼とし、②キーワード項目は啄木の精神的骨格にあった思想的、社会的諸要素を理會するために設けたものである。③人名、地名、文芸、社会、生活などの一般項目は、啄木の周囲に在った人々、移り住んだ土地、時代の文芸思潮など、啄木を、啄木の生きた時代空間に再現するために不可欠のものとして設定した。第三部には啄木作品出版史や新しいスタイルの年譜などを提供した。

事典項目の執筆者は一〇八名に上り、主として会員が分担した。文字通り、国際啄木学会一〇年の歴史と研究の到達を事典に表現したのである。しかしこの事典は、何

らかの統一的な啄木像を学会として提示したのではない、ということも断っておかなければならない。勿論、イメージ項目、キーワード項目によって、何らかの啄木像を描くことは可能であるが、それよりも項目の多様な組み合わせによって、読者の皆さんの中に多彩な啄木像を彫像して下さることを期待しているのである。啄木を育てた『明星』が多様な文学的個性の星雲であったことを想起すれば、如上のことは理會されるはずである。

二〇世紀はわが国の近代化が社会、人心に様々な光と影を投げながら、啄木の生きた時代と相似する。(時代閉塞の現状)を百年の後の我々に感じさせている。この『石川啄木事典』によって、一人でも多くの人が(時代閉塞)の向う側に、夢ある人間世界を夢見られることを願っている。(あとがき)より)

(編集委員) 池田 功・上田 博・
小川武敏・近藤典彦・瀧本和成・
堀江信男・遊佐昭吾
(おうふう) 二〇〇一年九月 六四七頁
四五〇〇円)

安森敏隆著

『介護・男のうた365日』

目次

- 一月 母の正月
- 二月 母は大王
- 三月 要介護5
- 四月 介護保険始まる
- 五月 母の癌
- 六月 母の部屋
- 七月 九十二歳
- 八月 適温二十七度
- 九月 胸の噴火
- 十月 命ひとつ
- 十一月 あんたはどなた
- 十二月 母の入院

母は、今年二〇〇一年に入った陸月の半ば、満九十二歳と六ヶ月で天国に召された。その日の最後の日記を掲げておく。
二〇〇一年一月十七日(水)曇りのち晴れ。朝早く淑子と、母が入院している病院に行ってみたが、昨日のごとく、黙っ

て寝ていた。食事を食べさせようとしたが、看護婦さんに食べさせない方がいい、と言われた。大学院の授業をしていると「急に様態が悪化し血圧が下がった」と電話があり、急いで帰った。病院で母の手をさすりながら、淑子が声をかけた。「おばあちゃん、聞こえるかあ．．．」「おばあちゃん、しんどくないかあ．．．」「おばあちゃん、よく頑張ったねえ．．．」「おばあちゃん、ずうっと一緒にいるからね。大丈夫よお．．．」と母の耳元で叫ぶと母のあけた口の中で舌がするつと動いた。淑子が「ア、動いた」と言うと、医師は、脈を取り、目を

あけ小さな懐中電灯で瞳孔を見た。「午後三時十二分です」と言われた。母は、息を引き取った。午後三時十二分、眠るよう息が遠のいた。お母さん、おじいちゃんおばあちゃんに会いましたか。お母さん、お父さんに会いましたか。本当に大往生でしたね。苦しむことも痛むこともなく逝ってくれたのが何よりも慰めです。そして、美しい、美しい顔でしたよ。みんなで、夜伽をしながら母と並んで寝た。

かあーかあーとのんびり鳴くからず
母三時十二分に逝く
母の顔やすらかなりし死にてなお

救われることもあるならん
梅の花十輪ばかりが庭隈に
蕾つけたり 母は死にたり
稲荷の山に鴉群れなし飛びゆけり
はは死にて一時間のち
(「あとがき」より)

(新葉館出版 二〇〇一年一月
二〇七頁 一八九〇円)

(姉妹篇) 安森淑子・安森敏隆著
『介護うたあわせ 介護・女と男の25章』
(京都修学社 二〇〇二年一月
一二九頁 二〇〇〇円)

会員の名著・新編著紹介

上田博・國末泰平・田邊匡・瀧本和成編『大正文学史』(二〇〇

一年一月 晃洋書房)

小林幸夫著『しげる言の葉』(二〇〇一年一月 三弥井書店)

浅田隆・和田博文編『文学でたどる世界遺産・奈良——交錯する

「古代」の記憶と「ものがたり」の記憶、万葉から近代に連なる古都の姿』(二〇〇二年一月 風媒社)

高田知波・中川成美・中山和子校注『新日本古典文学大系明治編

女性作家集』(二〇〇二年三月 岩波書店)

上田博編『きしのあかしや——木下李太郎随筆——』(二〇〇二年四月 日本図書センター)

本号では二〇〇二年四月までに刊行された会員の方々の新著、新編著を紹介いたしました。但し、本誌書評欄等できりあげたものは省略しております。この期間内で他に書物を刊行された方は本会までご一報下さい。次号にて紹介いたします。